

荻野富士夫名誉教授記念号の刊行にあたって

学長 和田 健 夫

荻野富士夫先生は、1975年に早稲田大学第一文学部をご卒業後、同大学院文学研究科で史学（日本史）研究者としてのキャリアを開始され、1982年4月から3年間の同大学文学部助手を経て、1987年10月に小樽商科大学商学部（一般教育系）助教授に就任し、1993年10月教授に昇任、2016年3月に定年退職されました。その後2年間の特任教授を含めて30年6ヶ月の長きにわたり本学の教育研究に多大の貢献をなされました。この間、1985年には、文学博士（早稲田大学）の学位を取得されています。2001年度と2015年度には一般教育系の学科主任を努められるなど、大学運営の面でもご尽力頂きました。

私にとって荻野富士夫先生の印象は、飽くことを知らない研究者としての姿です。先生のご専門は日本近現代史ですが、ご関心は非常に広く、実に多岐にわたる研究を成し遂げられました。

大学院入学以来一貫して取り組んでこられたのは、戦前・戦後日本の治安体制の研究です。先生は、これを弾圧する側とされる側の双方の視点から考察されました。業績は膨大で、それらをすべて挙げることはできませんが、たとえば、『特高警察体制史-社会運動抑圧取締の構造と実態』せきた書房1984年、『北の特高警察』新日本出版社1991年、『初期社会主義思想論』不二出版1993年、『戦後治安体制の確立』岩波書店1999年、『思想検事』岩波書店（岩波新書）2000年、『よみがえる戦時体制—治安体制の歴史と現在』集英社（集英社新書）2018年などがあります。雑誌・紀要等に掲載した論文・評論等の数は枚挙にいとまがありません。この間、1997年3月から1年間、アメリカのコロンビア大学で在外研究に従事されました。

先生の科学研究費助成金（文部科学省）による研究活動も特筆に値するも

のです。1999年から現在まで、基盤研究（C）の採択を受け続け、精力的に研究を続けておられます。その成果は、たとえば、『外務省警察史—在留民保護取締と特高警察機能』校倉書房2005年、『戦前文部省の思想統制—「思想統制」から「教学錬成」へ』同2007年、『北洋漁業と海軍—「沈黙ノ威圧」と国益をめぐる』同2016年として出版されました。

弾圧される側から見る日本の治安体制という視点は、先生を小林多喜二の研究に向かわせました。ここでも数多くの著書・論文がありますが、代表的なものとして、『多喜二の時代から見えてくるもの』新日本出版社2009年、(編集・解説)『小林多喜二の手紙』岩波書店(岩波文庫)2009年があります。2012年2月に、創立100周年を記念して本学で開催された小林多喜二国際シンポジウムでは、先生はその企画・運営にあたられました。世界各国の多喜二研究者による報告は、先生の編集になる『多喜二の文学、世界へ』小樽商科大学出版会2013年に纏められています。

さらにもう一つ、荻野富士夫先生と切っても切り離せないのが、本学の歴史(学校史)の研究です。本学の教員と共に立ち上げた「小樽高商史研究会」の研究成果は、創立90周年に合わせて出版されました(『小樽高商の人々』北海道大学図書刊行会2002年)。続く2011年の創立100周年の時は、百年史編纂室長として年史編纂の中心となり、企画・編集・執筆に関わられました(緑丘101号15頁、同百周年記念特別号20頁)。年史が周年の年に完成するのは極めて希なことだと言われています。本学の場合、『小樽商科大学百年史(通史編と学科史・資料編)』と『北に一星あり—写真集小樽高商・商大の百年』を、小樽商科大学出版会から、100周年の年に出版できたのは、まさに先生のご尽力の賜と言っても過言ではありません。当時私は百年史編纂小委員会の委員長を務め、先生の仕事を垣間見る機会がありましたので、そのことを身を以て感じております。先生がお一人で執筆された1,000頁に及ぶ『小樽商科大学百年史』の通史編は、緻密かつバランスのとれた内容で、私も仕事の上で活用させて頂いております。

教育の面では、先生は、学部において「歴史学Ⅰ、Ⅱ」、「総合科目Ⅰ」、「基

礎ゼミナール」, 「歴史と社会」, 「現代社会と歴史論」, 「研究指導」を, 大学院では「人文・社会科学特講」(現代商学専攻)を担当されました。「総合科目Ⅰ」では, 小樽の歴史・文化(その中には本学の歴史も含まれています)を学内外の講師が語る「小樽学」の構築を試みられました。ここでは, 先生の学校史研究の成果が活かされました。先生の退職後も引き継がれています。

先生は, 2002年から2016年まで, 専門ゼミナール＝「研究指導」も担当されました。日本の近現代の史料を読み解き, 議論を交わしながら, 基礎的な知識と歴史についての様々な見方を理解し, 過去とつながる現代の諸問題を考える視点を養うゼミでした。先生の丁寧な指導を通じて, 学生は, 高校時代とは全く異なる歴史への接し方に目を開かされました(2人のゼミ生の証言, 緑丘115号74頁)。42名の学生が荻野ゼミから育っていきました。

2018年1月31日, 先生の最終講義が行われました。テーマは「小樽・小樽商大における30年を振り返って」でした。先生の膨大な研究が, 絶えることのない関心と試行錯誤の中で生まれてきたこと, 小樽商大の自由な校風がそれを支えたことなどが語られました。

多方面にわたる本学へのご貢献に改めて感謝申し上げます。これからも, 健康に留意され益々のご活躍を期待するとともに私どもへのご指導をお願いする次第であります。